

# 友よ 第八回

赤神 諒



## 第八章 石ぐろと火振り

——天正十一年（一五八三年）四月、讃岐国・屋島



仙石家の家紋へ永楽錢を記した幟が海原の風にはためいている。  
強い潮の匂いが鼻を突く。

讃岐の春の海は、仙石秀久の順風満帆の人生にも似て、あくまで穏やかだった。

小豆島から屋島へ軍旅を終えた仙石は、ことさらにゆったりとした足取りで関船から下りた。自慢の太い鼻っ柱を膨らませる。

## 友よ 第8回

四国の地を踏みしめるのは、これが初めてだ。

先に讃岐入りさせていた配下の将兵が、恭しく出迎えてくれた。

このたび仙石は、主君羽柴秀吉の命を受け、十河存保を助けて長宗我部を撃退する援軍の総大将に任ぜられた。かつて信長は三男信孝を同じ任に充てたが、今や仙石は主筋だった織田信孝とほぼ同格と言えるわけだ。大出世ではないか。

仙石は鼻を突き出し、胸を張った。

大枚はたいて手に入れた黄糸威の具足は、派手に金銀を鏤めて光り輝いている。仙石はこの年、晴れて「淡路五万石」の城持ち大名となった。

——このわしなんぞが大名になれるとは。世は、勝ち馬に乗った者が勝つんじや。

秀吉は今まさしく昇龍の勢이었다。このまま柴田勝家を破ったなら、天下人になるだろう。他方、仙石は凡将だ。黒田官兵衛、加藤清正ら綺羅星のごとき有能な秀吉家臣たちと比べれば、甚だ見劣りした。だが世の中、上を見てもきりが無い。だから仙石は、いつも下を見てきた。そうすれば、たいてい良い心地でいられる。

仙石の最大の武器は、強運だ。生来、頭が切れる者、あるいは力の強い者がいるように、仙石は生まれつき運がいい。武芸はよく言っている人並みで、臆病で卑怯な人間だと自分でも思うが、ずる賢いといえるほどの知恵はない。だがとにかく、運にだけは自信があった。

## 友よ 第8回

美濃土豪の四男に生まれながら、兄たちが織田との戦いで次々と死んで、家督が転がり込んできた。太い鼻っ柱を褒められ、顔つきだけで信長の直臣となった。小太りの小男だが、この鼻っ柱とよく通る声音を合わせれば、もっともらしい豪傑に見えるのだ。

何より、秀吉に仕えたことが最大の幸運だった。

戦上手の秀吉の下で働いてきたから、勝ち戦の手柄ばかり立てられた。たとえば仙石はへ姉川あねがわの戦いでちょっとした戦功を上げたが、あの時は織田・徳川連合軍が数で敵を圧倒していたし、秀吉の命令通りに動けば、誰でも活躍できた。三木合戦みきでも敵は飢えと渴きで地獄の辛さだったろうが、仙石は命ぜられるまま城を囲んでいただけだ。淡路島を攻略した折りも、切れ者の官兵衛の教えてくれた通りにやったから、楽に勝てた。

——秀吉公が剣豪であるとすれば、わしは刀よ。

むろん鈍なまら刀だが、剣豪が操れば多少は役に立つ。刀が自らの意思を持つ必要など、ない。仙石ごときが無い頭を幾ら捻ったところで秀吉には遠く及ばぬし、命令に背けば責めを負わされ、損をする。ゆえに仙石は、何も考えず、秀吉に唯々諾々と従い続け、成功を重ねてきた。四の五の言わず主君の言う通りに動く家臣も、必要なのだ。

だが今回、仙石は四国攻めの具体策を秀吉から授けられていない。秀吉は柴田勝家との対決に頭がいっぱいで、問うても教えてくれなかった。

## 友よ 第8回

仙石は掌にびっしより搔いた汗を、腕を組むふりをしながら陣羽織の袖で拭いた。

——とにかく手堅くいくぞ。わしは大きく転ばねば、よいのじゃ。

四国上陸後はまず、古くて小ぶりの屋島城を落とすつもりだった。官兵衛に助言を求めると、小豆島経由で四国に入れと答えたので、何も考えずそうしようと決めた。

「屋島城の様子はいかががじゃな？」

迎へに出た家臣の庄林しょうばやし一心が、小さくかぶりを振った。

「長宗我部軍の士気は相当高く、二千の兵では容易に攻め落とせませう。すまじい」

仙石は口を尖らせた。運のいい仙石にしては、うまくない出だしではないか。

「城内の兵は、そんなに多いのか？」

聞けば、たったの数百だという。仙石が敵将なら、さっさと城を捨てて再起を図る。敵は寡兵で小城に籠もって、何がしたいのだ。

「援軍に入った谷彦十郎なる将が、なかなかの戦上手とか」

無能な人間が多い仙石家臣のなかで、庄林は珍しく役に立った。仙石より頭が良く、教養もあり、武芸に優れ、戦も上手だ。自分より有能な人間が仕えてくれるのはありがたいが、どこか世の中がおかしい気もする。

「じゃが、小西勢こにしとも約してあるゆえ、今さら変えられぬ」

## 友よ 第8回

朋輩の小西行長ゆきながが水軍を率い、時を同じくして、香西浦こうせいうらから藤尾城ふじおじょうを攻める手筈だ。小西はまだ若い、仙石より遙かに才能があり、戦も上手だった。

今回は小西と一緒にだから、気が楽だ。

「恐れながら、小西様はまだ讃岐の様子をご存知ありますまい。作戦の変更を申し出られませ。十河殿を助けるのがわれらの役目。されば屋島城は捨て置き、虎丸城とらまるじょうへ入られるべきかと」

庄林は自ら買って出て、先に讃岐へ潜入し、敵方の様子を調べた。

だが小西も当然、家臣に同じことをさせているはずだ。

仙石は腕を組むと、眉を顰めて深く考え込むふりをした。

存保は虎丸城に三千余の兵を掻き集めて籠城かしているが、長宗我部の軍勢は二万にも及ぶという。まともに戦って、勝てるはずがなかった。秀吉とて、まさか仙石率いる二千の兵で、四国の形勢が逆転できるなどとは露ほども思っていない。

仙石は畢竟ひつじつ、秀吉が勝家を打ち破るまで時間を稼ぐ役回りだ。十河が減びようと生き延びようと、仙石の知った話ではない。今、何よりも大事なものは、仙石がきちんと四国で仕事をしようとした証をはっきり残しておくことだ。

仙石が屋島城にこだわるには、ちゃんとした理由もあった。港に近いこの城さえ制しておけば、退路を確保でき、邪魔されずに小豆島へ逃げ込める。虎丸城からも一日ほどで逃げ戻れる。大軍相手に「善戦」

## 友よ 第8回

したと言ひ張るには、最も手頃な城だった。

だが、実際に戦場で命を張って戦うのは、仙石ではない。どのような庄林を説いたものか考えていると、仙石の背後に人が立った。

「父上、攻めやすそうな城でございますな」

次男の秀範だ。まだ二十歳にもならぬくせに、太い声だけは仙石に似て、まるで一人前のように聞こえる。出来の悪い半人前だが、偉そうに胸を張って庄林に対していた。

長男の久忠は凡庸な人間だったが、仙石の言うことを素直に聞いたから、うまが合った。あいにく病で失明したため、やむなく廢嫡して次男を後継ぎとしたのだが、秀範はすこぶる生意気な若造だった。父を敬わぬのは仕方ないにしても、感謝の念すらない。

淡路を出港する前の夜、仙石は大将に任ぜられて有頂天になり、すっかり酒を過ぎた。その場で秀範を屋島城主にしてやるぞと、上機嫌で嘯いたのを思い出した。少しは秀範に親を見直させたかった。

父は偉大な主君に仕え、四国攻めの総大将にまで任ぜられたのだ。

仙石はことさら秀範を無視して、庄林の肩に親しく手を置いた。

「庄林、まずは小手調べじゃ。万一落とせずとも、秀吉軍来たるの喧伝にはなろう。励め」

何事もなるようになる。ほかの人間は知らぬが、仙石は運がいいから大丈夫なのだ。

## 友よ 第8回



二

信親は田面山たもやまに敷かれた本陣脇の自陣で、仲間たちと共に南の敵城を望んでいた。これまでそばにいてくれた「三蔵」は一人減って、

「二蔵」になった。

讃岐の虎丸城は攻めるに難い堅固な山城で、北の与田川よだがわ、南の湊川みなとがわに挟まれ、四方に伸びる尾根にそれぞれ曲輪群くるわを持つ。守将の十河存保が堅牢な守りを固めていた。

隣で、資吉が金砕棒の先を地面に突き刺しては、ズンと鈍い音を立てている。

信親も大薙刀の赤柄を握り込んだ。新目弾正の片鎌槍が破損したため、川底に沈んでいた七条兼仲の遺品を使うことにした。体の一部にしようと、どこにいても暇さえあれば鍛錬してきた。異なる特質を持つ様々な得物えものに熟達すると、応用が利くようになる。一流の武芸者になってきた証だろう。

「敵の士気をなお昂たかぶらせているのは、秀吉の援軍でござる」

傍らの彦十郎の言葉に、信親は大きく頷いた。

すでにこの戦は十河存保ではなく、羽柴秀吉との戦いとなっていた。

援軍の将である仙石秀久なる人物を、長宗我部の諸将は知らなかった。有能な旧織田家臣団では影の薄い人物ながら、信長の与力として秀吉に付けられ、忠実に仕えてきたらしい。仙石の援軍を完膚なき

## 友よ 第8回

までに撃破すれば、敵は士気を喪失し、戦いを諦めるはずだ。長宗我部も援軍の上陸を懸念して、兵力の分散を強いられてもいた。だが、彦十郎が守る屋島城の攻略に失敗した後、仙石は小豆島へ逃げ帰って、鳴りを潜めていた。

「いかにして臆病者を島から引きずり出すか、思案が要りますな」  
資吉が太い腕を組んで唸っている。

二蔵も続いて蜂の羽音のようにうんうん唸るが、それで名案は浮かばない。

「川に譬<sup>たと</sup>えるなら、仙石は逃げ隠れしておる鰻<sup>うなぎ</sup>だ。皆はへ石ぐるを知っているか？」

また川の話かと、皆が少し呆れたような顔をしたが、信親は構わず続ける。

鰻は狭く暗い穴に隠れて棲む。その習性を利用した漁法だ。たぐさんの石を川の中に積み上げ、両手を広げたほどの大きさで、小山を造る。これを「へ石ぐる」と言い、放っておくと、知らないうちに鰻が入っている。干潮時に周りを網で囲ってから、石ぐるを崩し、鰻を捕まえるわけだ。

「総大将を命ぜられた以上、仙石も指を唾<sup>くわ</sup>えておるだけで、手ぶらでは帰れまい。讃岐のどこかに石ぐるを造れぬか？」

「なるほど。若の川好きも、たまには戦の役に立ち申す」

じっと讃岐の地図を眺めていた彦十郎が、初めて口を開いた。



## 友よ 第8回

「引田城をへ石ぐるゝにいたしましよぞ」

小豆島からほど近く、半島になっているため、船団が入りやすい。海から攻めやすい城は、恰好の餌になると彦十郎は説いた。

「敵の間諜は幾人も讃岐に入っておるはず。長宗我部が引田城を空っぽにしたと知れば、仙石は動きましよう」

「お待ちあれ。せっかく三好方から奪った要衝ではござらんか」

資吉が口を尖らせるが、信親は立ち上がった。

「だからこそ敵が食いついてくるのだ。虎丸城を落とした後で、全部取り返せばいい。さっそく父上に申し上げよう。彦十郎、従いて来てくれぬか」

近ごろは谷忠兵衛を差しおいて、彦十郎が直接元親に進言する場面も少なくない。

帷幄のへ七ツ片喰の家紋が見えてくると、信親はさりげなく辺りを見回した。

が、濃鼠の姿はどこにもない。忠兵衛に尋ねると、昨秋の中富川合戦の後、入江左門は行方知れずになったと答えてきた。策士の言葉の真偽は定かでないが、るいは今回の戦に出ていない様子だった。



海へ突き出した山城が見えてくると、仙石はびっしりと搔いた掌の汗を、手を置く垣立でさりげなく拭った。

## 友よ 第8回

「庄林、まこと大丈夫なんじゃろうな？」

「殿は城をひとつでも落としたいと、何度も仰せであったはず。この機を逃されますな」

——そうだ。何か、目に見える戦果が欲しい。

土佐は昔、都落ちした者たちの流れた地で、四国の連中は皆、田舎侍だと仙石はたかをくくっていた。

長宗我部の重臣が乗る土佐駒は体も小さく、鞍も曲がっていて、貧相な木の鎧あわぶきを使っているらしい。鎧も傷んだ箇所は麻糸で直してあり、長年の戦乱で一領具足たちも疲れ果てていると聞いていた。だが、噂は間違いだった。長宗我部軍はめっぽう強い。仙石なぞという二流の武将では、齒が立たないとわかった。

寡兵が籠もる屋島城を攻めると、待ち構えていたように一斉射撃を浴びせかけられた。落とし穴にはまり、熱湯が降り注ぎ、伏兵に襲われ、庄林が懸念した通り苦戦した。自前の兵を失っては大損だ。かといって、手ぶらでは帰りにくい。仕方なく屋島城を諦めて、南にある喜岡城きおかじょうや牟礼城むれじょうを攻めた。

もっと小さな城だから簡単に落とせるかと思いきや、今度は小癩こしゃくな屋島城の守将が寡兵で城を出て背後を襲ってきたため、手こずった。小城ひとつ落とせなかったと報告すれば、後で恰好がつかぬ。敵の援軍が来る前にどちらかでも落とそうと、兵を二つに分けて城攻めを掛けたが、失敗だった。今から思えば、庄林が言った通りどちら

## 友よ 第8回

か一城に集中すべきだった。いや、どれだけ兵を失おうと、無理にでも屋島城を攻略しておくべきだったのか。

いよいよ長宗我部が大軍で虎丸城を取り囲んだとの報せが入るや、仙石は震え上がって、兵を小豆島まで引いた。同輩の小西行長も失敗してくれたのが大きな救いだった。負けたのは、仙石だけではない。仙石のほうが秀吉にずっと長く仕えているのに、若い小西はうまく立ち回り、己の才を鼻にかけて増長していた。少しくらい負けたほうがいいのだ。

もちろん仙石はただ拱手傍観きょうしゅうぼうかんしていたわけではない。戦ったが、負けたのだ。

ちゃんと長宗我部軍と戦ったのだと、秀吉に一応は説明ができる。下手に動かず、この辺でやめておこうと、仙石が自らに言い聞かせていたとき、庄林が献策してきた。

——虎丸城の東、引田ノ浦から上陸して、引田城を落とされませ。

仙石はうっかり大声を出して、仰天した。

二万もの長宗我部の大軍が取り囲む虎丸城から、東へ一里も離れていない。これまでは虎丸城の西で戦ってきたが、小西の水軍を使っ  
て突如、東から攻めるといふ奇策だった。仙石は小西が一笑に付すだ  
ろうと期待したが、意外なことに小西は庄林の策を支持し、「敗北し  
たままでは終われぬ」と息巻く始末で、握り潰せなくなった。仙石に  
似て付つ和雷同わらいどうの得意な秀範まで、ろくに考えもせぬくせに賛同した。

## 友よ 第8回

いつもながら声だけは偉そうに太い。

実に迷惑な話だった。

誰が見ても劣勢は明らかだ。秀吉とて、仙石の浅知恵なんぞに一片の期待も懸けてはいない。もしもこれ以上傷口が広がったら、どうしてくれるのだ。

四国攻めの総大将は、あくまで仙石だ。

小西や庄林たちの反対を押し切って、このまま小豆島にとどまってもよいはずだった。だが、ひとつの策が示され、副将が同意した以上、もしも後に秀吉が耳にした場合、なぜその策を取らなかったのかと責められかねぬ……。

これまで保身を旨として無難に乱世を生き抜いてきた仙石が、初めて味わう危地とも言えた。

——虎丸城攻めのために、引田城はもぬけの殻。必ず落とせまする。知らぬが仏で小豆島にいるほうが幸せだったが、庄林は頼んでもいないのに、配下の者たちを使い、讃岐の敵情を探らせていた。

——けれど、庄林。もしも失敗したら、秀吉公よりお預かりした大切な将兵を失うことになるぞ。

仙石は保身の塊だと庄林には気付かれていようが、これまでさして繋がりなかった小西の前では、恰好を付けておいたほうが後々のためだと思い、言い方を工夫した。

——われらには船と海がござる。長宗我部の水軍は来ておりませ

## 友よ 第8回

ぬゆえ、たとえ事破れても、小豆島へ逃げられます。

仙石は腕を組んで、深く考え込むふりをした。以前、何も知らぬ輩から、戦場で仙石が考え込む姿に感銘を受けたと聞いてから、しっかりと眉を擡ひそめることだけは忘れない。

失敗した場合に備え、浅慮ではなく、悩み抜いた末の決断だったと後で小西にも言わせねばならぬ。

秀吉は何をどこまで望んでいるのか。

敵は大軍だ。仙石を総大将としたのは、どのみち勝てぬ戦だからだ。別に死なれても惜しくない人間だから、選ばれたのだ。だが、小西は違う。年功序列で副将とされたが、秀吉はあわよくば勝利を期待しているのか。

——されば小西殿は、引田を攻めるべしと言うのじゃな？

——何度もさように言うており申す。

確かに小西は、今まで三度ほどそう言っていたが、仙石には他に尋ねることがなかった。

戦の勝ち負けなど、時の運だ。勝てるかどうか、仙石ごときにわかるはずもない。副将の言に従うのだから、今回は負けた責めを小西と分かち合えるだろう。秀吉とて、お気に入りの小西の顔を立てる以上は、仙石を厳しく処断できぬはずだ。

庄林が言うように、今回は陸と違って、逃げ道さえ船でしっかりと確保しておけば、恐れる必要はなかるう。ならば試さねば、損か。よ

## 友よ 第8回

し、面倒臭いが、やるしかあるまい。

だが、負けた時のために、とにかく考え抜いたという形が大事だ。

退屈だったが居眠りせぬように心がけ、四半刻しはんときほど経ったくらい

で、ようやく仙石は眉を顰めたまま目を開け、重々しく口を開いた。

——敵は大軍なれば、簡単な戦ではない。されど、秀吉公の御為、命を懸けるは武士の本望。われらは引田城を攻める。

狙い通り、居並ぶ者たちは、仙石の決断を重く受け止めたはずだった。

どんな決断でも、不相当に時間をかければ、多少は重く感じるものだ——。



海風は心地よいが、悶々としながら海を渡るうち、早くも目の前に引田ノ浦が見えてきた。

「思ったより、立派そうな城ではないか……」

東西南北に曲輪があり、石垣が築かれ、出丸まであった。本当に仙石なんぞで落とせるのか。

「敵は今、出払っておりまする」

口を尖らせる仙石に向かって庄林が大きく頷くと、惨めなほど心臓が早く鼓動した。

怖い、やるしかない。

仙石の周りには、努力さえすれば自分も秀吉とか官兵衛とか、一流

## 友よ 第8回

の人間になれるはずだと、勘違いする輩がいた。だが人の才能は、ほとんど生まれつき決まっている。努力で変えられるとしても、ごくわずかだ。この世は一流の人間ばかりではない。むしろ大部分は二流、三流の人間だ。

仙石はいかにも小粒で、間違えても一流の武将ではないが、さりとて三流ではない。二流でも、運さえ掴めれば出世できるのだと、皆に示してやりたかった。二流にも、矜持があるのだ。

「先陣は小西殿に譲ってやろう」

空城くうじょうの計という策もあるらしい。いきり立つ若造を先に乗り込ませたほうが安心だ。

やがて仙石の乗る関船が、陸へ向けて速度を落とし始めた。



「のう、小西隊はどうしておるんじゃろな？」

近習きんじゆたちに小声で訊ねても、返事はすぐに戻ってこなかった。皆、

仙石の相手どころではない様子だ。

仙石は全身にびっしり冷や汗を掻いていた。盛夏を思わせる日差しが煩わしい。

お気に入りの焦茶の頬当の下に汗がべっとり付いて、痒かゆい。太めの指を差し込むのだが、頬の肥えた贅肉が邪魔で、肝心の痒い部分まで届かない。苛立ちは募るばかりだった。

## 友よ 第8回

昔、顔に傷のあるほうが凄みも出ると言って、わざわざ痛い思いをしながら自傷した三流の男がいた。だが、臆病な人間が体に傷を付けたところで、かえって反発を買っただけだ。怪我をしたら痛いうえに、顔がもっと不細工になる。余りにひどい醜男だと、ぶおとこ見ているほうも不愉快になり、損をする。だから仙石はほおあて頬当を愛用した。

冷や汗のせいで、体じゅうが気持ち悪いが、それよりも仙石は長らく恐るべき強敵と戦っていた。尿意と便秘だ。出陣前には必ず用を足すのだが、総大将としての緊張のせいか、出したいのにろくに出不かった。激戦の最中、おいそれとははか憚りには行けぬ。小も大もひたすら我慢していると、大のほうはうまく引っ込んでくれたが、そのぶん猛烈に放尿したくなっていた。

長宗我部軍の戦い方に、仙石は怯えるというより、呆れていた。童たちが楽しく戦ごっこをしている中へ、大人たちが本気で割り込んできたようだった。

——何なのじゃ、こやつらは……。

庄林が断言した通り、見張りだけの引田城は簡単に奪取できた。あえてもっともらしく厳しい表情は変えなかったものの、仙石は内心で小躍りしていた。

これで、やっと保身のための証ができたとホッとしたところへ、すぐに長宗我部方の香川勢が攻め寄せてくる、との知らせが入った。

今度こそ仙石は気乗りしなかったが、若い小西や庄林を始め、勇ま



## 友よ 第8回

しい連中が「打って出る」とがなり立てた。

——総大将は、このわしなのじゃぞ……。

と繰り返し思い、内心は不快でならなかった。

皆、四の五の言わず、総大将に従うべきではないのか。だが、舟の立つ小西に説かれると、うまく反論できなかった。口下手なだけでなく、頭の巡りが小西に従って行かぬのだ。「攻めねば、攻められるだけ。このままでは敗北は確実ですぞ。秀吉公に何と言いつて諷刺なさる？」と詰め寄られたが、どうしてよいか、仙石にはわからなかった。結局、小西に任せたほうが賢かろうと考えた。



ど、どん、と響く鉄砲の一斉射撃の音に、仙石は覚えぬ尿を漏らしただ。でも少しだけだ。

また、あの白鉢巻の鉄砲隊だろう。恐るべき早撃ちと命中率だった。

——まったく、まるで話が違うではないか……。

庄林の献策による伏兵が奏功して、幸先さいさきは良かったのだ。

総大将である仙石はむろん後方に控えていたが、仙石隊では庄林が陣頭で指揮を取り、小西隊と共に奮戦してくれ、このまま勝てはすまいかと錯覚を抱きさえした。

だが先刻、突然、予期せぬ敵の動きがあった。

何と、川舟の一群が戦場近くを流れる小海川おうみがわを一気に下るや、下船した敵の一団が味方の側面へ切り込んできたのである。よもや川か

## 友よ 第8回

ら舟で敵が来るとは思わず、羽柴軍は混乱した。長身の若き将は、白銀に紅糸威の具足に身を包み、陣頭に立って大薙刀を振るいながら、猛攻を加えてきた。後で知ったところでは、長宗我部の御曹司らしい。虎丸城を包囲していた元親本軍が戦場に到着したのだった。

長宗我部信親の登場を機に、あれよあれよと形勢が変わり始めた。

白鉢巻の指揮する鉄砲隊には散々に撃ち崩され、小兵が率いる弓兵隊の一斉射の前に足踏みをし、押され始めた。そこへ化け物のような連中が襲いかかってきた。中でも、剛勇無双の福留隼人率いる漆黒の隊と、本軍に合流した信親の隊は、噂どおり勇猛苛烈だった。信親は全身を返り血で染めながら、何度も突撃を繰り返す。その隣で金碎棒ぼうちょうを振り回す巨漢もまるで手に負えなかった。頼みの庄林が死に物狂いで奮戦しても、どんどん押し込まれてくる。

「仙石勘解由殿、戦死なさいましてございまする！」

背筋がゾツとした。遠い縁戚で、ずっと従ついて来てくれた男だ。仙石に次いで運がよく、逃げ足の速い勘解由がまさか死ぬとは、よほど厳しい戦場なのだろう。

——いかん、長宗我部は一流じゃ。二流では勝てん……。

相手は、加藤清正や福島正則ふくしまのりのごとき怖いもの知らずの猛将だ。曇り空で寒いくらいなのに、仙石は額に滲み出る冷や汗を何度も拭いた。

この戦場に、仙石なんぞを守りたい者など誰もいまい。味方は皆、

## 友よ 第8回

秀吉のために、仙石の指図で戦っているだけの話だ。内心は仙石を軽蔑しているに決まっていた。

——次の突撃で、陣を破られるのではないか……。

信親隊の波状攻撃は、まるで巨龍がのたうちながら噛み付いてくるようで、そのたびに寿命が縮む気がした。もう五年分は縮んだのではないか。

仙石は床几しよこに腰掛けながら、いつ引田城へ撤退するかだけを悶々と考え続けていた。

顔つきだけは豪傑もどきで、どっしりと構えるふりをしている。惨めなほど千々ちぢに乱れた内心を知っているのは、同じ弱虫の秀範くらいだろう。いや、庄林にも勘付かれているか。

「怯むな！ 押し返せ！」

前方では、秀範が声を嚙らして叫んでいた。

さしたる武勇もないくせに、前線に立って何とするのだ。いや、秀範が戦死してくれたほうが、秀吉の同情を得られて都合か。子だくさんの仙石には、まだ後継ぎになれる男児が二人いた。秀範よりは三男のほうがました。少しは仙石の話に耳を傾けてくれる。

仙石は目を皿のようにして戦場を見渡し、撤退するきっかけを探した。誰かが進言してくればよいのだが、皆、恐るべき敵を相手にまだ命懸けで戦っていた。

敵の数が多い。もしや元親は虎丸城の包囲を完全に解いて、全軍で

## 友よ 第8回

攻めてきたのか。だとすれば、敵は十倍ほどもいるではないか。

仙石は心底焦った。

若々しい雄叫びが聞こえると、仙石はまたぶるりと体を震わせた。大薙刀を突き出しながら馬を乗り入れてくるのは、御曹司の信親だ。勇ましい掛け声を聞いただけで、仙石は逃げ出さなくなった。

——誰じゃ、こんな恐ろしい連中と戦うと言い出しおった、愚か者は……。

馬で駆け戻った庄林がひらりと下馬した。真っ青な顔をしている。こやつも、しょせんは二流だ。

「殿、もはや次の突撃は支え切れませぬ。撤退のご命令を！」

——阿呆めが。もっと早う言わんか！ だが待て。ここで、すぐに飛びついてもいいのか。

内心で罵倒した仙石は、逸<sup>はや</sup>る心を抑えつつ、十ほど数えてから重々しく頷いてみた。

わざとゆっくり立ち上がろうとした。が、立ち上がれぬ。腰が抜けていた。

——何ゆえわしが、こんな奴らと戦わねばならんのじゃ。

間近で上がる鯨<sup>けい</sup>波に、全身が震え出した。

泣きそうになった。怖くて堪らぬ。股間に何やら生温いものを感じた。変だ。

仙石は慌てた。余りの恐怖に、尿を漏らしているらしい。止まらぬ。

## 友よ 第8回

どうせ冷や汗で全身が濡れているのだ、構うものか。ずいぶん溜まっていたらしく、まだ放尿は続いている。小袴はもちろん脛巾はばきから足袋たびまでぐっしりと濡れてゆく。

嫌な臭いが足元から立ち上ってきた。

ひどく焦りながら、顔だけは平然を装い、いつものように眉を顰めて、腕を組んで深く考え込むふりをした。

だが仙石は、心の中で頭を抱えた。

誰よりも運だけはいはいはずの仙石が、珍しく今回はついていない。せつかく大抜擢されたのに、強敵相手に殺されかかって、小便まで漏らすとは……。

——これほど惨めな目に遭うなら、敵が強いとわかった時に、最初から逃げればよかったのだ。今度負けると思った時は、何があるかと真っ先に逃げてやる。命あつての物種じゃ。

目を開けると、庄林が鼻をヒクつかせていた。

漏らしたと気付かれたのか。さりげなく足元を見ると、乾いた土の上に尿の水たまりが出来始めていた。慌てた仙石は、さりげなく草鞋わらじで周りの砂を蹴り寄せ、水たまりを隠そうとしたが、かえって湿りは広がった。

「や、やむを得まいが、小西隊は大丈夫か？」

小西が戦死するか、先に敗退してくれるほうが、順序としてはありがたかった。今回の出撃は小西の責めだ。仙石は総大将だが、本当は

## 友よ 第8回

最初から反対だった。あくまで秀吉お気に入りの副将に押し切られて、その言に従っただけだ。

「わが軍が引かねば、小西隊も城へは戻れませぬ」

なるほど、右には敵、左は海。一番後ろにいる仙石が城への退路を塞いでいるわけだ。

近習に手渡された槍を正面に持ってくると、柄を杖代わりに使って腕の力で立ち上がった。何やら足がガクガクしている。ちゃんと逃げられるのか……。

「撤退じゃ」

声の震えと痰が絡まったせいで、庄林に聞こえたかどうかかわからなかった。

「引田城で、戦いを続ける。小西殿にも伝えさせよ」

今度はいつものように太い声を出せた。われながら言い回しも上手だったと思うと、少し元気が出てきた。

「庄林、先に行け」

尿の水たまりを見られなくなかった。それだけの理由で先に行かされたが、すぐに後悔した。殿軍を務めさせるべきだった。逃げる途中で、庄林を追い抜かすしかない。

馬を連れて来た近習に手伝ってもらい、鐙に足をかけた。

堅固な引田城へ戻れば、ひとまず助かるはずだ。いざという時のために、沖合には船を停泊させ、きちんと逃げ道も作ってある。

## 友よ 第8回

だが馬上の仙石は、はたと迷った。こんな時は、なりふり構わず逃げてよいのか。

振り返ると、庄林が立派に殿しがりを務めてくれている。

これまで仙石は、秀吉のもとで勝ち戦ばかりだった。まれに秀吉が負けても、運のいい仙石は病やら留守居やらで、負け戦には出ないで済んでいた。そのため、逃げ方をよく知らなかった。

仙石は引田城へ向かい、ひとまずゆったりと駒を進めた。

総大将が真っ先に逃げ出したのでは恰好が付くまい。総崩れともなりかねなかった。後で誰ぞから秀吉に告げ口をされてはかなわない。

それよりも困ったことに、また便意を催してきた。小便が済んだせいか、今度は耐え難いほど大便をしたくなった。しきりに放屁しているが、治まらない。馬の背の鞍に必死で肛門を押し付け、何とか便意をごまかそうとした。大便を漏らさぬためにも、揺れを気にしながら、ゆっくりと馬を進める。

「お前らは、踏みとどまらんか！」

秀範の太い声が間近で聞こえた。必死の形相で仙石を追い抜き、われ先にと逃げている。

「お待ちくだされ！」

駆ける雑兵どもがあっという間に仙石の馬を追い越し、城へ向かって逃げてゆく。

## 友よ 第8回

「ま、待たんか！」

仙石は慌てた。皆が逃げたら、誰が総大将、仙石秀久を守るのだ。背後で雷鳴のような鯨波が聞こえた。

恐るおそる振り返ると、長宗我部の将兵が仙石勢の幟のぼりを奪って、氣勢を上げている。

白銀に紅系威の将が見えると、仙石の全身がぶるぶる震え出した。信親は敗走する仙石勢を後ろから蹴散らし、まっしぐらに向かってくる。速い。

——早う、逃げねば。

仙石は手綱を引いたが、味方の兵どもが行く手を塞いでいる。

懸命に逃げる味方の雑兵どもが邪魔でならぬ。このままでは総大将が討たれるではないか。

馬蹄ばていの音が背後まで迫ってきた。

——いかん、殺される……。

仙石は背後に向かって悔し紛れに己の槍を投げつけた。片手で簡単に払われた槍は、どこぞへ飛ばされていった。

「じ、邪魔だ！ どけい！」

仙石が喚わめきながら馬を乗り入れると、手下の足軽どもが驚いて散った。

「われこそは長宗我部信親なり。総大将仙石秀久殿とお見受けいたす。尋常に勝負されよ！」



## 友よ 第8回

朗々とした高めの声が聞こえると、仙石は前を逃げてゆく足軽の幟を引っ搦んだ。

力任せに奪い取った幟を、後ろの信親めがけて投げつけた。

「殿、それがしが時を稼ぎます。その間にお逃げくださりませ」  
森権平だ。若い頃から面倒を見てきたから、仙石の言うことを聞いてくれる良い若者だ。秀範のような恩知らずとは違う。

「お、おう。権平、後ろを頼むぞ！」

だが、前には邪魔な連中がいる。

「ええい、どかんか！」

仙石は思い切り馬腹を蹴った。馬が驚いて棒立ちになる。手下の足軽を後ろから踏み潰すようにしながら、敗軍の中を抜けてゆく。

——何とか逃げ切れそうじゃ。

仙石は尻の下に、温かいねっとりしたものを感じた。夢中で逃げるうち、糞をすっかり漏らしていたらしい。まるで肥溜めに落ちて、もがいているような気がした。

川沿いに逃げ、城門まであと少しだと安心したとき、左手で鬨とぎの聲が上がった。背のひよろ高い若者と、ちびが二人で指揮している。伏兵だ。殺される——。

仙石は狂ったように、何度も馬腹を蹴った。

馬が驚いて駆け始めると、鬣たがみに必死でしがみついた——。

## 友よ 第8回



五

羽柴軍を撃破した長宗我部軍は、引田城の西麓せいりくに布陣していた。信親たちは、仙石らが逃げ込んだ山城が夕暮れに沈んでゆく様子を見上げている。

「まったく、羽柴勢は口ほどにもありませんだな」

資吉は気持ちよく暴れ回ったらしい。

川舟による信親衆の奇襲に始まり、彦十郎の鉄砲隊、桑名の弓兵隊で撃滅し、信親、隼人と資吉が突撃した。彦十郎の策で二蔵も退路へ回り込んで待ち構え、逃げる敵将を襲った。

「あの臆病者なら、わしらでも討ち取れましたに、あと一步。無念でござる」

二蔵が口々に言い、しきりに残念がった。

幟ほろほろも全部捨てて這てい々の体で逃げ出した仙石とその将兵は、命からがら引田城までたどり着いた。

「彦十郎、あの敵なら、降伏するのではないか」

引田城は三方を海に囲まれる小さな半島に築かれた山城で、攻めるのは容易でない。ちっぽけな城に恐るべき将兵たちが籠もっていた藤目城とは、正反対と言えた。

「小心者ゆえ、応じるやも知れませぬが、長宗我部が不利となれば、すぐに裏切りましょう。さりとて、わざわざ首を刎はねるほどの将でもござるまい」

## 友よ 第8回

「逃げ帰らせるのが、最善か」

「仙石なら、何度攻めて来ても勝てますからな」

資吉が減らず口を叩く。必死の形相で逃げてゆく仙石の姿を、巨体で真似して見せた。

「保身に汲々とする者には、逃げ道を作ってやり、脅かせば、勝てまする」

彦十郎の言葉に、ふと信親は思いついた。

「次は火振りで、参るか」

土佐で鮎を捕るとき、月のない夜に篝火を岸边に並べ、竹竿に吊るした松明を揺らしながら小舟で川を動き回る。火に驚く鮎たちを驚かせて、網に掛ける漁法だ。

「単に火攻めと呼べば、よろしかろう」

「いや、少し違うのだ。火振り漁では、鮎を焼き殺すわけではない。

こたびの戦でも、敵を四国から追い払えば足る」

「逃げ足の速い仙石とやらを討ち取りましょうぞ！」

息まく資吉を、彦十郎が制した。

「いや、愚父の話では、仙石某は凡将ながら、なぜか秀吉に気に入られているらしい」

乱世の常道では、敵の将兵を減らすにしくはない。だが仙石を戦死させれば、後に秀吉との和睦を望んだとしても、難航する恐れがあった。

## 友よ 第8回

「敵を追い払う手だてだが、四万十では、ガラ引き漁というものをやるらしい」

小魚のゴリを捕まえるためにサザエの殻をたくさん網にくくりつけ、川底でガラガラと音を立てさせる。音に驚いたゴリを、仕掛けておいた罠へ逃げ込ませる漁法だ。

「なるほど。海側へ敵をやるために、資吉の隊を北へ回らせ、大騒ぎさせましょう」

「光と音で脅せば、仙石は飛んで逃げてゆきまするな」

資吉が舌舐めずりしながら笑った。



もしも淡路島を覆う雨霧がこのまま永遠に晴れねば、生き延びられように……などと、仙石は愚にも付かぬことを考えていた。

洲本城すもとじょうの主郭では、仙石と秀範が親子喧嘩の最中だった。逃げる船中で始めてから、断続的に口論は続いていた。

「秀吉公が父上を総大将に任じられたのは、柴田との決戦に要らなんだからじゃ」

おろん百も承知だ。だが、わざわざ口にする事柄ではない。

「何じゃと？ もういっぺん言うてみい！」

声を荒らげても、秀範はまるで動じなかった。仙石が臆病者だとよく知っている。

## 友よ 第8回

「あの官兵衛でも、寡兵で長宗我部になぞ勝てませぬ。十河が減んだとて、四国など後から攻め取ればよいのじゃ。十河は助けられんと、秀吉公も重々おわかりであったはず」

馬鹿息子のくせに、多少は世の中が見えてきたらしい。

「長宗我部は四国統一まで畿内へ攻め込ませぬ。守りを固めるだけだよかったのでござる」

秀範は後悔ばかりして、繰り言を並べる。三流の証だ。

「柴田にさえ勝てば、秀吉公に怖い者はおらぬ。捨て駒の父上が死ぬが生きようが、秀吉公にとっては、どうでもいい話よ」

「わしが滅びたら、お前も滅ぶんじやぞ」

「いや、父上は家督を譲り、頭を丸めて高野山へ入れよ。さすれば皆、路頭に迷わんで済み申す」

睨みつけると、秀範は豪傑もどきの髭面ひげづらに、冷たい眼差しで正面から仙石を見返してきた。秀範を嫌いで堪らぬ理由がわかった。見掛け倒しの顔つきも、身勝手な性格も、仙石に生き写しだからだ。自分のような人間を、好きになれるはずもない。

——こやつは、己の事しか考えておらん。  
肚はらが煮えくり返った。秀範の胸ぐらを掴もうと手を伸ばしかけて、やめた。

若い秀範のほうが、鍛錬不足で腹も出てきた仙石より、強い。幼い頃は殴りつけたものだが、腕つぶしではもう勝てなかった。こんなと

## 友よ 第8回

ところで、馬鹿息子に殺されたら、大損だ。

「失せろ。わしは必ず生き延びる。が、お前にだけは家督を継がせん」  
秀範が足音荒く去った後、仙石は洲本城の主郭から、ぼんやりと雨に煙る海を見ていた。

——猿が怒るじゃろうなあ……。

秀吉は信長に「猿」と呼ばれていた。もともと仙石は信長の直臣だったから、最初、秀吉とは対等に接していた。秀吉にはとても敵わないとすぐにわかり、以来、犬のように忠実に従ってきたが、別に猿を好きなわけでもない。秀吉のために死ぬと言われたら、迷わず断る。

淡路島まで逃げ帰った仙石は、必死で兵を掻き集め、守りを固めさせた。

引田城へ逃げ込んだ時は、長宗我部に降伏するか否か、悩み抜いていた。もしも「命は助ける」と降伏勧告があったなら、なりふり構わず飛びついていたはずだ。

だが、敵は夜明け前に火を放った。北からは何やら騒々しい連中が迫ってくる様子だった。火も音も虚仮威こけおどしだと引き止める庄林を今度は振り切り、仙石は迷わず城を捨て、真っ先に海へ逃れた。敵が城を囲んでいたら、落ち着いて夜も眠れぬではないか。

仙石はこれまで、ほぼすべての物事を損か得かで決めてきた。損得勘定で動いて、何が悪い。

損する者は損をし、得を追い求める者は得をする。天地開闢てんちかいびやく以来、

## 友よ 第8回

誰も逆らえぬ真理だ。

この世で最も大事なものは、わが身だ。わが身に代えられるものなど、何も無い。千載せんざいに名を残すなどと綺麗事を言いながら死んでゆく馬鹿もいるが、生きているうちが華なのだ。

長宗我部には御曹司の信親を始め、一流の将が揃っていた。今回の負け戦は、相手が強かったただけだ。二流の仙石に勝てるはずもなかった。別に悔しくとも何ともない。

負けた今は、いかにして取り繕うかが、何より肝要だ。

幸い一族を含め、少なからぬ将兵が死んでくれた。この戦死を使わぬ手はない。奪い返されたとはいえ、曲がりなりにも城をひとつ落としたのだ。

——いっそのこと、猿が負けてくれんかなあ……。柴田と長宗我部は結んでおる。柴田が勝ったら、すぐに降くだるべきじゃな。

そうなれば、仙石は一生、長宗我部の風下に立たされるわけか。

いつものように仙石は腕を組んだ。誰も見ていないと気づき、癖で顰めた眉を元に戻した。

仙石には本当に信じられる家臣がいなかった。没落した荒木村重あらかきむらしげの元家臣などに仕官するよう頼み込んだが、扶持ふちを渋っているせい、あらかた断られた。たまに家臣となってくれても、優れた者は、何かと理由をつけて、仙石のもとを去ってゆく。

庄林一心は珍しい例外だが、腰掛けのためにいるだけで、苦楽を共

## 友よ 第8回

にする気もなく、いずれはより優れた主君のもとへ去るだろう。仙石が改易かいえきされたら、真っ先に見限るに違いなかった。

——これからの綱渡りは、八分がた運で決まる。わしはこれまで運だけで生きてきた男じゃ。必ずなるようになる。わしは何かと役に立つ男じゃからな。

仙石は謙虚な人間で、自分が二流のつまらぬ人間だとしっかり弁えていた。だからこそ高望みをせず、凡庸な家臣でも使ってくれる秀吉に愚直に尽くせるのだ。

秀吉の取り立ては決して偶然ではない。仙石は秀吉の意のままに、疑義ひとつ差し挟むことなく動く。逆立ちしても刃向かえはせぬから、安全な駒として使えるわけだ。将棋で喩えれば、歩だ。秀吉の如き有能な人間には本来、賢い輔佐など必要ない。手足となって動く馬鹿さえいればいいのだ。

——やっぱり猿が勝って、今まで通りわしを使ってくれるのが一番じゃなあ……。

「殿、秀吉公の勝利にござる」

部屋へ現れた庄林が知らせてきた。近江の賤しずヶ岳がたけで柴田が大負けしたらしい。ちょうど仙石が引田で長宗我部に散々な目に遭わされていた日だという。

「長宗我部は運がございませぬな」

この男は何が言いたいのだ。



## 友よ 第8回

この世は、運の強い者が勝つ。仙石はやはり運がいい。



土佐が暑い夏を迎えても、まだ名のない新寺の境内が涼しげなのは、近くを流れる香宗川こうそがわの水音が絶え間なく運ばれてくるからだろ  
うか。だが、汚れを清めてくれる川も、るいの穢けがれた血まみれの過去  
を変えられはしない。

るいは褥しとねで寝返りを打った。

香宗川の流れを見たら、信親はどう言うだろう。

小さくとも、きつと何か良いところを見つけて、「俺はこの川も好  
きだ」とるいに微笑むに違いない。

長宗我部が讃岐で羽柴に大勝したとの報せに、土佐は沸いていた。  
住職も興奮して知らせてきたが、るいは信親の無事を知って安堵し  
た後、今も無事だろうかと案ずるだけだった。

病のように全身がだるくて重いのは、体よりも心の傷のせいだろ  
うか。

同じ川の上流に建つ香宗城から目と鼻の先のこの地に、香宗我部  
家の現当主である親泰ちかやすが菩提寺ぼだいじを作るそうだが、名はまだ決めてい  
ないという。

香宗川の辺でまた悲劇が起こったのは、やはり香宗我部の血が呪  
われているせいか……。

## 友よ 第8回

るいは隣の小さな褥に目をやった。新たな命は、もういない。

——あと少し、守りきれなかった……。

忍びは自分の体のわずかな変化でも、気が付くものだ。昨冬、勝瑞城から凱旋する途中で、るいは信親の子を身籠っていると知った。

以前に孕まされた時は、迷わずすぐに命を流した。だが今回は女として、愛する男の血を引く子を産みたいと願った。同時に、長宗我部宗家がこの命を認めまいとわかっていてもいた。

信親との仲も、妊娠も隠して、これまでと変わらず黙って命を受け、忠兵衛に悟られまいとした。信親にも自分の消息を一切知らせなかった。だが、半年もせぬうちに、忍びとして体が利かなくなった。羽柴勢が攻めてきた春の戦も、身重のために出られなかった。

今や香宗我部家は、完全に長宗我部に取り込まれていた。身寄りもないるいが頼ったのは、石谷ノ方だった。

病臥していた石谷ノ方は、るいが信親の子を宿していると聞くと、ひどくやつれた顔を輝かせ、るいの下腹に手を当てた。るいは病を理由にしばらく動けないと忠兵衛に文を残し、石谷ノ方が手配してくれた寺の宿坊で子を産むと決めた。その寺がかつての香宗我部領にあると聞いた時は、不吉な予感を覚えた。

だが、石谷ノ方から人徳に厚い義弟親泰は信ずるに足り、まだ正式に建立されていない寺で出入りも少なく、身を隠すには恰好の場所だと説明されて、納得した。るいは以前、石谷ノ方に仕えていた一侍

## 友よ 第8回

女だとして、素性はおろん伏せてあった。いざ出産に際しても、頼りになる産婆を差配してもらった。

るいは三日前、無事に男児を産んだ。だが――  
廊下を歩いてくる気配がした。そろそろ来るとわかっていた。

谷忠兵衛が狩衣に烏帽子姿で現れると、るいは半身を起こした。

「親泰公は、この寺を『宝鏡寺』と名付けられるそうじゃ」

一切何も起こらなかったかのように、いつもの穏やかな口ぶりだ。  
「わが父の菩提は弔われないのでしょね」

「今さら左様な奇麗事をして、秀通公が喜ばれると思うか？」

反問に答えないでいると、忠兵衛が香宗川に背を向け、逃げ場を塞ぐように座った。

「公は忠義に殉じた者たちと共に、御墓所で眠りに就いておられる。  
余計な節介は焼くまい」

「香宗我部の血を引く子の命を奪うのは、節介ではない、と？」

この寺でも、るいは身边に注意していたが、一昨日出された雑炊に無味無臭の毒が入っていたらしい。万事のんびりした住職への布施に、毒草でも紛れ込ませていたのだろう。母乳を通じて、毒殺されたとしか考えられなかった。一級の忍びは毒も薬も扱う。忍びには不可欠な毒慣れが、かえって裏目に出た。るいの体は気付かなかったのに、赤子の命を奪うには十分だった。

「若殿がお前に懸想されたとき、呪われた血は宗家に入れられぬと

## 友よ 第8回

言うておいたはずじゃ。以前は自ら流したではないか。なぜ、こたびは産んだ？」

るいは答えず、忠兵衛の猫顔を睨みながら、逆に問い返した。

「香宗我部の呪いを、本当に信じているのですか？」

今から二十七年前の弘治二年（一五五六年）、るいの父、香宗我部秀通は謀将久武親信ひさたけちかのぶと若き元親の策謀にかかった。長宗我部家に欺かれ、当主の座も、城も乗っ取られた。敵に降った実父に襲われたとき、秀通は実父に刃は向けられぬと自死を選んだ。秀通はその時、腹を搔っ捌いて己の血で川を作ると、その上に生まれて間もない女の赤子を置き、「長じて後、必ず長宗我部の滅亡を見届けよ」と言い聞かせ、長宗我部を呪いながら死んだ。

「時に神官は、道理で説明が付かぬ出来事に出くわす。呪詛じゆそもまた、そのひとつ」

血の川で眠る赤子を殺そうとした久武親信を止めたのは、元親だった。るいは親信により、忍びとして育てられた。自分の素性も、香宗我部の悲劇も、るいは知らされなかったが、長じて後、香宗我部の遺臣から亡父秀通の死に様を密かに明かされた。

幼い頃から、血の川で溺れかける夢や、血まみれの顔で何かを訴えかける男の夢を見る理由がわかったとき、るいは恐れを感じた。まだ物心つかぬころ、るいは長宗我部のへ七ツ片喰かたばみの旗を脇差で切り刻んでいたらしい。

## 友よ 第8回

「これから、何とする？ 羽柴あたりに寝返って、憎き長宗我部を滅ぼすか？」

忠兵衛が囁くように尋ねてきた。

「長宗我部は憎い。でも、その御曹司は愛おしい」

「入江左門がすっかり人の心を取り戻したか。されば、これからは地獄の始まりじゃな」

親信の腹心であったる、いゝの忍びの師は冷酷非情な男で、るいがいかなる感情も持たぬよう、幼少から徹底して躰けた。命の軽さを弁えさせるべく、何度も犬と戦わせ、惨殺を命じた。何があっても、自分の感情を押し殺すことが日々の習慣だった。最初は心が痛んだが、やがて何も感じなくなり、敵に寝返った師を返り討ちにした時も、心はいたって静かだった。

ゆえに自分の素性を知った後も、るいの中に別段の感情は生まれなかった。長宗我部は香宗我部を滅ぼしてるいゝの境涯を変えたが、るいを生かしたのも元親だった。元親が当主となった長宗我部に対し、いかなる感情を抱くべきなのか、るいにはよくわからなかった。命ぜられるまま、忍びの仕事を続けていた。

喜怒哀楽を知らぬ忍びに、初めて人間らしい感情を抱かせたのが、信親だった。

信親に出会うまで、もしもるいゝに人間らしさを思い出させる何かがあったとすれば、野良猫くらいだった。まだ少女のころ、猫の鳴き

## 友よ 第8回

声を習得すべく野良猫を手懐けるうち、可愛がるようになった。犬を殺す埋め合わせの気持ちもあった。過去に、るいを愛そうとした男もいたが、るいは全く心を開かなかった。だが、あの時とは違う。今では信親を慕う気持ちがるいのすべてだ。信親のためなら、誰がどうなってもよい。もちろん、るいもだ。

「わたしは長宗我部のためでなく、御曹司のために、この命を捧げましょう」

るいの返事に、忠兵衛は静かに頷いて立ち上がり、部屋を出ようとしたが、背を向けたままぼそりと呟いた。

「どちらも、同じことだ」

その通りだ。るいは信親が継ぐ長宗我部のためなら、死ねる。

たとえ会えずとも、信親のことを想うだけで、心に明かりが差してくる。

今ごろ信親は、物部川ものべがわに出ると噂のへ猿猴探しえんこうにでも夢中になっているだろうか……。



夏の夕日が沈むには、まだ時があった。

物部川河口近くの支流、後川うしろがわ沿いにある林の中に、皆で身を潜めている。

「よいか。猿猴にはまず胡瓜きゅうりを渡すのだ。決して傷つけるなよ。俺た

## 友よ 第8回

ちは友になるのだからな」

真剣そのものの信親の顔を見ながら、航八はこくりと頷いた。

物部川に猿猴が出るという噂がにわかに広まったのは、初夏の頃だ。それからというものの、猿猴探しに精を出す物好きが現れ、姿を見たという川の近くには店まで立つ始末だった。

讃岐の戦から帰国した信親が噂を聞きつけ、さっそく探しに出かけたが見つからなかった。ところが航八は昨日、老漁師の祖父から「猿猴を見た」と話を聞いたのである。場所は物部川の河口に近い支流だった。

たいてい信親の出丸にいる二蔵から、以前に「猿猴を見つけたら、直ちに知らせよ」と言いつけられていたため、すぐに注進したところ、信親衆の出動となった。もっとも、軍師の谷彦十郎は「私は忙しい」と一蹴し、小難しそうな書物に埋もれているらしい。

物部川は石清川いわしがわより大きく、四万十川しまんとかわ、仁淀川によどがわと並べてへ土佐三大河川さんと地元では呼んでいる。今朝、皆で舟に乗り、中流から川べりをくまなく探した。大男の資吉が「猿猴は胡瓜を好む」という噂を聞きつけたため、信親と一緒に食べるのだと言い、胡瓜を十数本竹籠たけかごに入れてあった。

「若殿、本当に丸腰で良いのでございますかな」

二蔵の一人、のっぽの十市が心配そうに語りかけると、航八の後ろで巨漢が唸った。

## 友よ 第8回

「拙者がおるんじゃ。心配いたすな」

「されど、猿猴は猿のように鋭い爪を持っておるそうでござるぞ」

ちびの松崎が囁くと、幼馴染のせせらぎも「固いくちばし嘴もあるそうですよ」と、心配そうに付け加えた。

「俺たちは猿猴の敵ではない。仲良うするのに、得物は要らぬ。違つか」

「されど、いきなり襲いかかってきたら、何となさいまする？」

十市がぶるりと身を震わせると、信親が大きな手でせせらぎの頭を撫でた。

「向こうが警戒せぬよう、最初はせせらぎから話しかける。胡瓜を渡して、遊んでくれと頼むのだ」

「かしこまりました」

せせらぎが胡瓜を握り締めながら、こくりと頷く。信親のような長身より、小柄な女童めわらわのほうが猿猴も安心するはずだ。

「若様、猿猴に攫さらわれてはかありません。泳ぎがとても上手だそうですから。わたしもせせらぎと一緒に参ります」

信親は満面の笑みを浮かべると、もう一つの手で航八の頭を撫でてくれた。

「それはよい。猿猴とうまく友になれたら、お前たちの大手柄だ」

「若殿、猿猴と友になって、長宗我部は何か得をするのでございますか？」



## 友よ 第8回

ちびの松崎が首をかしげている。

「損得は知らぬが、出丸で共に酒を飲めば、愉快だとは思わぬか」  
皆、それぞれに何やら想像しているらしく、楽しげな顔つきに変わった。

信親は暇さえあれば城下に来て、民に明るく話し掛ける。出丸で若者たちが宴会をするとき、信親は自ら城下の魚や野菜を買いに出ることもあるし、航八に限らず誰とでも親しくなった。航八にとっては、御曹司というより、戦で死んだ兄のように思える。十四になった航八も、そろそろ戦に出る齡ごろだが、それなら信親のもとで戦いたいと考えていた。

「若、猿猴を信親衆に加えましょうぞ。川でやる戦なら、役に立ちそうじゃ」

「資吉なら、女子の猿猴に懸想でもしそ、うじゃな」

二蔵が口々に言うと、「そいつは思いつかなんだ」と資吉が興奮し始めた。

「猿猴に恋をするのは構わぬが、俺は人同士の争いに、猿猴を巻き込むつもりはない」

「若さま！ あれを！」

せせらぎが鋭く囁く。

小さな指が差す先、岸辺の葦あしの陰に、川の中をゆっくりと歩いてゆく小柄な姿が見えた。すでに陽は沈み、薄暗がりだが、体は緑色のよ

## 友よ 第8回

うだ。

「航八、せせらぎ、出番だ。俺が後ろについている。何かあれば、必ずお前たちを守る」

信親の生真面目な表情に、航八とせせらぎはコクリと頷いた――。



「二蔵、すまんが、後片付けを頼むぞ」

「命に代えましても、資吉を叩き起こして、寢床まで歩かせまする」

赤い顔で答える十市と松崎の肩を軽く叩いてから、信親は部屋を後にした。

今夜の出丸も、祭りのように賑やかだった。

本来なら猿猴を歓迎する宴だったが、主賓が不在でもやろうという話になった。次の戦で誰が死ぬか知れぬ。それなら、亡き戦友たちを偲びながら、生きてある友たちと今を楽しむのも悪くないと、信親は近ごろ思っている。宴と言っても贅沢はせず、せいぜい誰かが釣り上げてきた魚を焼いて食べるか、民が気の向いた時に持ってきてくれる胡瓜の漬物や小魚の佃煮などをつまみながら、安酒をたしなむ程度だ。

寢所に入ると、寝着姿で漣みおが待っていた。今日は吐き気がすると寝込んでおり、宴にも顔を出さなかったため、少し気懸かりだった。

「加減はどうだ、漣」

## 友よ 第8回

「おかげさまで、もう大丈夫のようです。猿猴には、お会いになれなかったそうですね」

「ああ。人騒がせな人間もいるものだ」

慰めるように、漣が信親の手を握った。

「物部川にはいなかったというだけです。四万十には、いるかも知れません」

「無論だ。必ず会いに行く」

ふっくらした顎あごの下をくすぐると、漣が声を立てて笑った。少し、肥えたるうか。

「結局、四万十にお連れできなんだが、それでも母上にはひとつだけ、孝行ができた」

漣が信親にすがりついてきた。抱き締める。

「いつも心配を懸けていたが、順番だけは間違えなんだからな」

長宗我部軍が戦のさなかに撤退したのは、さまざま理由を付けてはいるが、本当は石谷ノ方が亡くなり、元親も信親も戦意を喪失して、戦を続けられなくなったからだ。

引田で羽柴勢の援軍が敗退し、長宗我部軍が大軍で虎丸城を包囲すると、存保は城を捨てて、十河城へ撤退した。元親は最後の拠点である十河城へ軍を進め、長宗我部軍を止める者はないやに見えた。

そんな時、讃岐制圧を目前にして、土佐から石谷ノ方が危篤だとの知らせが入った。他方で、柴田勝家が敗死したとの凶報も届いており、

## 友よ 第8回

本来なら長宗我部は讃岐も淡路も制して、秀吉の背後を突くくらい  
の勢いを示さねばならないはずだった。

だが、元親と信親は讃岐攻略を一旦中止し、急ぎ土佐へ帰国した。  
それでも、死に目には会えなかった。元親の落胆は大きく、出陣は翌  
年以降とされた。すでに葬儀も済ませたが、信親が猿猴探しさようぼんに狂奔  
し、連夜のように宴を開いたのも、母の死があったからだ。皆、それ  
をわかって、付き合ってくれている。友と何かをしていなければ、一  
日中ぼんやりしていたらうか。

長宗我部にとっては、乱世で手探りの闇を進むような苦闘の時期  
が、これからも続く。

それでも今、信親は立ち上がれなかった。元親も同じらしい。

「あまり気負われてはと思い、申し上げませんでしたはが、義母上はうえは最  
後に仰せでした」

腕の中で、漣が顔を上げた。

「自分はとても幸せでした、信親さまには、弟たちや姉妹、皆を頼み  
ます、と」

わかっている。だが、立ち上がれぬのだ。

「お父上のことも、頼みます、と」

「……さようか」

おしどり 鴛鴦夫婦だった滝にとって、最愛の夫を残して逝くのは、さぞ気懸  
かりであつたらう。

## 友よ 第8回

「でも、信親さまはきっと今年のうちに、猿猴にも負けぬ待ち人にお会いできますから」

「誰だ？ 俺が幻の赤目でも釣るのか？」

「違います」 零が口を尖らせてから、美しく微笑んだ。

「信親さま、子ができたようでございます」



十

土佐神社の秋を物悲しく感じるのは、赤子の命まで奪う乱世の非情に、自分でも嫌気が差しているせいだ。

たとえ戦火で社を失った神官であろうとも、戦をせず、手も汚さずに済むのなら、その人生のほうがよかつたろうかと、今さらながら忠兵衛は考えてみるのだ。

「されば、彦十郎が申したことは、すべて真と認めるのか？」

齒軋りしながら激昂する長宗我部の御曹司に向かい、忠兵衛は深々と平伏した。信親の隣には、同伴してきたわが子彦十郎がいる。

「御意にございます」

信親は怒りに声を震わせながら、念を押してきた。

「そなたは、俺の子を殺したのだぞ」

「お赦しくださりませ。石谷ノ方様のご逝去もあって、御館様も与り知らぬ一件。すべて、身どもの一存でございます」

品行方正な信親は、家臣を打擲したりなどせぬが、怒りにわれを

## 友よ 第8回

忘れて斬られたとてやむを得まいと、忠兵衛は覚悟していた。

握り込んだ信親の拳は、膝の上に置かれたままだ。

百ほど数えられるほど沈黙が流れたが、いつまでも声が掛からなかった。

そっと身を起こした忠兵衛は、内心驚きの声を上げた。

信親は天を仰ぎながら、滂沱ほうたと涙していた。

「可哀そうではないか……」

溢れる涙を袖で拭うと、信親は荒々しく立ち上がった。

「爾後じご、るいに手出しはさせぬ。父上と直談判して、るいを正式に信親衆に加える。これより俺はるいと共にあるのだ。よいな？」

るいは完全に信親の心を掴んだらしい。その気になれば、次代の長宗我部を牛耳ることもできよう。思わぬ事態となった。これが、香宗我部の呪いなのか。

「御館様のご命とあらば、ご随意に」

「俺は幼少よりそなたから多くを学び、正しき道を知った。悪しきことは一つも教わらなんだ。俺の自慢の師の一人であった。悲しいぞ、忠兵衛」

足音荒く信親が立ち去ると、彦十郎もゆらりと立ち上がった。忠兵衛と彦十郎が示し合わせた父子の芝居だとは、純朴な信親に気付かれています。

無言で会釈して去る息子の背に、言葉を投げた。

## 友よ 第8回

「彦十郎よ。いずれお前も、汚れ役を務めねばならぬぞ」

久武親信の代わりを引き受けるようになって、忠兵衛も痛いほどわかってきた。安寧を保つためには、誰かが手を汚し続けねばならぬのだ。

「承知してござる。が、若にはもう、気付かれておりましょう」

なるほど、さすがに親信と忠兵衛が教えた聡明な御曹司だ。忠兵衛は苦笑した。

彦十郎も去った後、隣室の襖ふすまがそっと開いた。

「御曹司はもう、そなたのものじゃな。長宗我部を乗っ取るか？」  
かぶりを振るるいは、濃鼠の忍び装束に身を包んでいた。

「信親さまのため、長宗我部を滅亡の淵から救わねばなりません」

長宗我部が引田で仙石の軍勢を大破した同じ日、近江の賤ヶ岳では、柴田勝家が羽柴秀吉に大敗していた。その月のうちに、勝家は北ノ庄城を攻められて自決し、柴田家は滅亡した。信長の三男信孝も敗れて自害し、滝川たきがわか一益かずますら反秀吉勢力も討滅されていた。秀吉が畿内を制圧しようとしている。天下がこのまま秀吉の物となれば、長宗我部は滅ぼされよう。

「今、四国でできることは少ない。畿内の情勢を探りつつ、三河の徳川殿に必ず届けよ」

中国の毛利が秀吉と結ぶなら、秀吉に対抗できる大勢力は徳川家康しかなかった。長宗我部と利害は完全に一致している。元親も了承

## 友よ 第8回

した。至急、同盟の膳立てを進めねばならぬ。

忠兵衛が懐から出した元親の密書を手渡すと、るいは音もなく姿を消した。

(続く)